

## 古今東西の詩歌を愛する多くの読者へ

ヘルダーは「ドイツ」民謡を編纂したのではなく、「民衆の」ひいては「人類の」歌声を集めようとした

## 宮谷尚実

嶋田洋一郎 訳

## ▶ヘルダー民謡集

11・10刊 四六判808頁 本体10000円  
九州大学出版会

古くから伝わるドイツの民謡や民謡を集めた書物といえ、白晝姫」や「ヘンゼルとグレーテル」など有名な「グリム童話集」(初版第一巻一八二二年・第二巻一八一五年)がまず思い浮かぶだろう。また、「ドイツのマザーグース」とも言われる「少年の魔法の角笛」(初版一八〇六〇八年)もマラーによる付曲で現代にいたるまで知られている。これらはフランク革命やナポレオンによる占領などを経て高まっていたドイツのナショナリズムと軌を一にした文学運動の実であり花である。庭や丘で実るリンゴ、野に咲く花々、それらに不可欠なのは肥沃な土壌であるが、まさにそのような存在が、今回初めて日本語で全訳がなされた『ヘルダー民謡集』である。

ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー(一七四四〜一八〇五年)は、歴史哲学や言語哲学や文学に影響を与えた思想家として名前が挙がることが多いが、彼自身の仕事、特に念は多義的であり、「一般庶民」も「国民、民族」も「人類」も意味しうる。つまり、ヘルダーは「ドイツ」の民謡を編纂したのではなく、「民衆の」ひいては「人類の」歌声を集めようとしたのだ。ヘルダーの師友ハーマンの言葉「詩は人類の母語である」(『美学提要』)や、ヘルダー自身が「人間の」最初の言語は詩歌の要素の集成(『言語起源論』)と述べたその理念を具体化すると、まさにこの『民謡集』のような姿をとるのだらう。

ドイツ語、英語、スペイン語、イタリア語、スコットランド語、リトアニア語、古典ギリシア語、古典および中世のラテン語ほか、原詩の言語はヨーロッパ全域を網羅しており、歌われているのは恋愛や戦いをほしめ、人類が経験する生と死に深くかわる内容である。注目すべきは、この古今東西の「フォルク」の歌声が、国や民族のまとまりで配列されていないことだ。例えばスペイン語(1・3・8〜9)のあとにドイツ語(1・3・10)が、その次にはラップランド語(1・3・11)、それからギリシア語(1・3・12〜14)、そして英語(1・3・15〜18)、そしてまたドイツ語(1・3・19〜20)、その後はシェイクスピアの『オセロ』からの「ステモノナの小唄」や「ハムレット」からの一節が続く。こうした配列により、本書第一部冒頭にスペイン由来の英語の恋歌で出てきた女性サイ一々が第一部第二巻の馬上試

合の歌で再び登場したり、当時の古典主義で理想化されていたギリシア語の直後にラトヴィア語の詩が並べられたりするので、読者の好奇心はおおいに刺激され、厚い本のペーシを何度も行き来することになるだろう。だが、この配列による出版は決して自明ではない。本訳書は、ヘルダーが「人類」とりわけ「庶民」の詩歌を集めることを意識して編んだ『民謡集』全二巻(一七七八〜七年)の配列を採用しているが、ヘルダーの没後に出版された改訂版では、「民族・言語圏」別に配列が変更されているからである。さらに多くの民族の詩歌を網羅して人類の「声」の総体を示す計画の晩年のヘルダー自身が抱いていたことを踏まえ、実際にはヘルダーの友人が編集作業をほどこした結果、『民謡集』は改訂版「歌謡における諸民族の声ぐえ」(一八〇七年)へ変容した。

その「諸民族の声ぐえ」で『民謡集』からいくつかの詩が削除された。逆に追加された民謡のなかには、クリスマス・キャロルへいざ歌え、いざ祝えの原曲が含まれる。ドイツでも日本でも、時を超え宗派を超えて愛唱されつつついているこの賛美歌の原曲は聖母マリアを讃える舟歌で、シチリアで船乗りが歌っているのをヘルダーが採譜したといわれる。本訳書は『民謡集』を底本としつつ、「諸民族の声ぐえ」で補遺として追加された部分も訳出しているため、ラテン語の歌詞がついた楽譜(二六四ページ)にまで日本の読者がアクセスできようになった。惜しむらくはこの浩瀚な民謡集が必然的にボリューム面でも価格面でも一般読者の手に届きづらいことだ。『グリム童話集』が初版から版を重ねていくなかで「小さい版」を出したり、絵入りの「一枚絵」で広まったりしたように、『ヘルダー民謡集』の小さい版、できれば対訳やドイツ語の朗読音源もついている普及版があれば、ゲーテの詩「野ばら」の原型や、「魔王」にインスピレーションを与えたデンマーク民謡「魔王の娘」や、「子供の魔法の角笛」にも採録された歌がより多くの読者に届き、ヘルダーが『民謡集』第二巻の序文で翻訳の難しさについて苦悩を吐露していた言葉の響きを朗読音源で体感することも可能になるのではないだろうか。そうした願望を抱くことができるのも、ひとえに訳者がヘルダーと共有する「翻訳に対する情熱」(七七三ページ)によってこの大部が刊行されたおかげである。音楽と文学の領域横断的にヘルダーの『民謡集』に関する研究が日本でも進むなか、比較文学、翻訳論などの諸領域において本訳書に研究の基礎文獻として高い価値があることは言うまでもない。古今東西の詩歌を愛する多くの読者がこの重厚な宝箱に接することを強く望む。

「文芸とは全人類の共有財産であり、一部の知的上流階級の私有財産ではない」

追記された部分も訳出しているため、ラテン語の歌詞がついた楽譜(二六四ページ)にまで日本の読者がアクセスできようになった。惜しむらくはこの浩瀚な民謡集が必然的にボリューム面でも価格面でも一般読者の手に届きづらいことだ。『グリム童話集』が初版から版を重ねていくなかで「小さい版」を出したり、絵入りの「一枚絵」で広まったりしたように、『ヘルダー民謡集』の小さい版、できれば対訳やドイツ語の朗読音源もついている普及版があれば、ゲーテの詩「野ばら」の原型や、「魔王」にインスピレーションを与えたデンマーク民謡「魔王の娘」や、「子供の魔法の角笛」にも採録された歌がより多くの読者に届き、ヘルダーが『民謡集』第二巻の序文で翻訳の難しさについて苦悩を吐露していた言葉の響きを朗読音源で体感することも可能になるのではないだろうか。そうした願望を抱くことができるのも、ひとえに訳者がヘルダーと共有する「翻訳に対する情熱」(七七三ページ)によってこの大部が刊行されたおかげである。音楽と文学の領域横断的にヘルダーの『民謡集』に関する研究が日本でも進むなか、比較文学、翻訳論などの諸領域において本訳書に研究の基礎文獻として高い価値があることは言うまでもない。古今東西の詩歌を愛する多くの読者がこの重厚な宝箱に接することを強く望む。